

留学先国名 : オーストラリア

留学先学校名 : サンシャインコースト大学

留学期間 : 平成 28 年 2 月 22 日 ~ 平成 28 年 12 月 15 日

この留学は言語面、生活面、精神的な面においてこれまでに経験したことのないことがたくさんありました。

帰国子女や海外生活の経験がないいわゆる‘純ジャパ’の私にとって、日本語圏以外で生活することは非常に様々なことを引き起こしました。一番印象に残っているのは私の住んでいた寮のルームメイトに始まるコミュニケーションの問題です。この経験によって私は根本的なことは文化の壁を越えて同じであるのではないかと思うようになりました。

そのルームメイトは私がオーストラリアに着いて初めてちゃんとした会話をした人たちであり、私の英語がどれほど通じるかを確認する初めてのタイミングでした。結果、ほとんど会話は成り立たず、私は絶望の淵に立たされることになりました。なぜなら、私はここまで自分の英語が通じず、相手の言っていることが通じないと思っていなかったからです。日本にいるときから、留学生とかかわる機会を意識的に持っていて、英語を話す機会もありました。そのため、海外に行っても言語的な問題は何とかかなと思っていました。ルームメイトはオーストラリア人とアメリカ人留学生、明らかに私の英語力不足と思われたのです。しかし、その後の大学のオリエンテーションでは、多くの学生とコミュニケーションが成り立ちました。このことから、英語と一言で言っても、様々な英語があると初めて実感しました。ですが、このことは英語に限ったことではなく日本語においても同じことなので、潜在的に知っているはずでした。なぜなら、日本語で会話している時でさえ聞き取れないことや、文章の構成のせいで相手の言っていることが理解できないことは多々あったからです。様々なバックグラウンドを持った人たちが構成されているオーストラリアで、そういったことが日本よりかなりの頻度で起こることは考えてみれば明白でした。それは、言語だけでなく文化的なコミュニケーションのずれ違いも含まれているでしょう。こう推測した私は、精神的にかなり救われました。また、コミュニケーションのずれ違いが起こるようなときでも、聞き直すことに躊躇したり、わかったふりをするのを減らすように努力しました。この点に関して、苦労はありました。なぜなら、頭でわかっている、行動にすることはそれよりも難しいからです。これらは根本的な問題なので、海外生活する人に限る問題ではなく、私も克服したわけではないので、これからも意識的に努力していこうと思っています。

大学の授業スタイルに関しても、様々な違いがあり学ぶことはたくさんありました。多くの授業は週に 120 分のレクチャーと 60 分のチュートリアルで構成されていて、レクチャーがいわゆる日本の大学で行われている授業で、チュートリアルは少人数でディスカッションを行うクラスです。感心した点は、様々な都合を持った人たちでも勉学に励めるようにシステムが整っていることです。レクチャーは録画されていますし、基本的に話を聞くだけなので、極端に言えば、その場にいる必要はなくインターネット環境があればいつでもどこでもレクチャーを聞くことができます。これはテスト前や復習したい時に非常に役に立ちましたし、働きながら学生をしている人たちにとってもありがたいことだと思います。また、チュートリアルは議論を行うので出席は前提条件ですが、レクチャーとは違い、複数の曜日と時間帯で行われているので自分に合った時間を選ぶこ

とができます。さらに、教授側もそのことをよく理解している点も感心しました。システムだけが先行しているのではなく、学生と教授側の両方の理解を得ることは時間がかかるうえ難しいことなので、素晴らしいことだと思います。成績評価の方法も、出席しているだけで評価を得られることはなく、積極的な参加がどの授業でも求められました。私には、これまで出席していればある程度の成績は保証されるだろうという感覚があったので、積極的な参加が前提の評価方法は良い緊張感をもたらしてくれました。

生活面においては、日本との違いをととも感じました。私がいた地域は、いわゆるリゾート地で、バスで20分ほど行くとビーチがあるようなところですよ。お店は午後5時ごろに閉店するのが基本で、店自体も生活に必須なスーパーやレストランくらいしかない上、移動時間や交通費を考えると身動きがかなり取りづらい環境でした。そのため日本で住んでいたところとは全く違い、かなり不便を感じるがありました。しかし、他の側面を見てみると、そこには足りないところを周囲の人たちと助け合ったり、ゆっくりとした時間を家族や友達と楽しむ人たちがいました。これも日本が例外というわけではなく、世界共通で都市において失われがちの部分だと思います。日本に帰ってきて驚いたのはコンビニの多さをはじめとした便利さです。徒歩数分、数十秒のうちに何件もコンビニがあります。私はその便利さを知っていますし、当たり前のように使っていました。しかし、コンビニの数だけ働いている人がいて、早朝や深夜に働いている人がいます。私は、そこまでしてこの利便性を維持する必要があるのかと疑問に思い始めています。なぜなら、その利便性は深夜早朝労働をする人たちの存在や不便な中でもやりくりしたり、助け合ったりする精神を犠牲にして維持されているからです。この経験は、働くことの意義を改めて考え直させてくれるいい機会になりました。

海外留学と聞くと、何か素晴らしい偉業を成し遂げないといけないという気持ちに駆られがちですが、そこまで気負いする必要はないと思います。やらなければいけないこと(課題など)をして、日々の生活の中の小さな違いにアンテナを張っていれば学べることはいくらでもあると思います。何が日本と違うのか、なぜ違うのか、長所短所はどうか、現地の人たちはどう思っているのか、これらのことを意識するとより濃厚な留学生活になると思いますし、私が留学生活で得た大きな成果だと思います。